



Forget me



not

Canan

花男爵が造る春の庭は甘い香りに満ちている。

花海棠は紅色のつぼみをほころばせて、コブシの白い花は雪のように散り始めた。

「春ですねえ。」

しみじみとした瞳子の呟きに、花男爵ものんびりと答えた。「花の季節ですねえ。」

お互いに顔を見合わせて、なんとなしに微笑む。彼の庭は彼の人間性を受け継いでとても静かで穏やかなのだ。時々思い出したように狂い咲く花以外は、彼の庭は季節と順序を間違えたりしない礼儀正しい性格をしている。

「紅茶をもう一杯いかがですか」

「ええ、いただきます」

彼の紅茶はおいしい。次の一杯を飲みたくなる魔法がかかっているようだった。

紅茶を飲みながらも、彼の眼は庭の隅々を見渡している。孫を見守る祖父のようだ、と瞳子は思う。花男爵はいつも慈愛に満ちた表情で植物に向き合っていた。

「花男爵は花が本当にお好きですね。」

「僕、ですか」

あなたしかいないでしょうとは言わずに、瞳子は頷いた。彼は時々植物に思いを馳せすぎて人の会話に疎くなることがある。天然なのかもしれない、と瞳子はひっそり思っている。

「いつもお優しい顔をしてお花や、樹を見ていらっしゃるから」

ティーカップにコブシの花が滑り込んだ。

「いいえ。」花びらを取り除きながら、花男爵は静かに首を横に振るのだった。

「僕は、取り立てて花が好きなのではありませんよ。」

植物に向けるいつものあたたかな態度とは裏腹に彼はあっさり否定した。瞳子は思わず口を開きかけた。でも、花男爵は言葉を選んでいただけだと気づいて手持ち無沙汰にティースプーンをカップの中にかき混ぜた。彼は慎重な男なのだということも、何度か重ねるお茶会の中で瞳子が気づいたことだ。

「僕の大切な人がね、大好きだったんです。」

そう言った花男爵の表情があまりにも淋しげだったせいで、瞳子は何も言えずにぬるくなった紅茶をごくりと飲み干した。砂糖の味だ。そういえば花男爵の暗い表情を見たのはこれが初めてかもしれない。

「すみません、気になりますよね。」

「ええ、まあ。」否定をせずに頷くと、彼は何も言わず微笑んだ。

花男爵は多くを語らない。でも、彼が話さない限りは無理に聞かないと瞳子は決めていた。

瞳子にも自分の中で温めておきたいことがあるからだ。

ティーコジーを取り去ったポットから再び湯気を立てる茶色の液体がカップに注がれる。

やっぱりいい香りがした。どうぞ、と勧められるままに口にしてしまうからもうお腹はずいぶんと水っ腹だ。

「もうすぐあやめが咲きますね。コブシも、これが見納めになりそうだ」

向けられた指の先は、今まさに散りつつあるコブシの花だ。

「その頃にお話します。今年の花は今年だけだからね」

こんなにも花を愛でているように見える彼が花を愛していないなどとは、やはり瞳子には信じられなかった。

瞳子が次に花男爵の庭でお茶を飲んだのは、彼の誘い通りあやめの花が咲く日だった。いつもと同じく、彼とお茶をする日特有の暑くも寒くもない心地よい気候だ。庭の反対側にはエニシダの黄色い花も見える。相変わらずこの庭にあるものは花も木も生き生きとしていた。

「いつもお茶請け、ありがとうございます」

いつの間にか、お茶会での役割は自然に決まっていた。

お茶と場所を提供してくれるのは花男爵、お茶請けは瞳子がどこかで買ってくる。

彼は何も言わないから、いつも瞳子の好みだけでお茶請けは決まっていた。

最後の一滴まで紅茶を注いでから、花男爵はようやく椅子に腰を落ち着けた。紅茶をおいしくする魔法の一滴で、ゴールデンドロップと呼ばれているというのを教えてくれたのも花男爵だ。彼は植物のことだけでなく、おいしく紅茶を飲む方法にも詳しいのだ。

「冷めないうちにいただきますよ」

「はい」

ふたりのお茶会に実のところ会話はあまりない。花男爵は外の出来事をあまり知りたがらないし、瞳子も話好きではないから当然と言えばそうかもしれなかった。

「エニシダは、魔女の箒になった木とも言われているんですよ。」

うすぼんやりとエニシダに目をやっただけで花男爵は説明を寄越した。今日は珍しく周囲に注意を払っているらしい。波のある彼の注意力にはいつもいささか困惑させられるが、この程度の目の動きで気づかれたことに瞳子は驚きを禁じ得なかった。

「今日は、何かありましたか、男爵。」

瞳子の遠回しな尋ね方には首を横に振るだけで男爵は否定する。

あえて言葉ではなく行動で示すことが多いのは彼の癖だった。

「人と関わることがあまりないから、しゃべるのが苦手になってしまったんです。」と以前花男爵は言っていた。そんな彼と一緒にいると、どうしても瞳子も言葉選びに慎重になってくるのだった。

「あなたに僕のことを話す約束でしたからね。」

おやそんなこともあったかしら、と瞳子はようやく思い出した。

ああ、そうだ。彼はエニシダの由来にもあやめの世話の仕方にも詳しいのに、花が好きというわけではないのだ。その理由を口にしかけたことで花男爵の表情はひどく淋しげに曇ってしまったのだ。途端に花男爵の様子が腑に落ちて、ひとり静かに頷く。

庭の主に関わらず、相変わらず粛々としているままだった。

「男爵、わたし別に無理に聞くんもりはありません。」

このひと時が悲しい終わり方をしてしまうのが嫌で、瞳子は制止の言葉を花男爵に投げかけた。しかし彼はきっぱりと一彼にしてはほとんどないことだが—「いいえ。お話しします。」と告げたのである。

「あなたに聞いてほしい話なんです。」

食えない微笑みはいつものまま、花男爵は優雅にティーカップの中身を注ぎなおした。

ティーカップの中身は淡いシャンパン色をしている。

瞳子は新しい一杯を飲んで口元をひきつらせた。いつ飲んでも草の味がする。

春摘みのファーストフラッシュは香りこそさわやかだが、味は青臭くて渋みが強い。花男爵も同じように口に含んでは八の字に眉を寄せていた。嫌いなら飲まなければよいのに、と瞳子は毎年この季節に思う。

でも、花男爵の庭を完成させるには必要なのだろうとも思う。だから瞳子は何も言わない。

品性を感じさせる薄紫の花が風に揺れた。房状の藤ももうすぐ次の花のために散り始める。

何度か池の鯉がするようにぱくぱくと口を開閉してから、花男爵はようやく一言を吐き出す。面積の割に謙虚な緑の区画ををじっと見つめながらだった。

「僕の大切な人は、ずいぶん前にいなくなっていました。彼女は僕の生きが이었다。

けれど、もう会えないでしょう。」

浅い呼吸をしたような言葉だった。言葉と表現するにはいささか勢いが弱すぎる。

そこでようやく花男爵と目があった。瞳子は曖昧に微笑んだ。彼の表情は思ったよりもずっと明るい。

でも、大切な人に再び会えないと語る彼の心中を思うと複雑な気持ちにならずにはいられなかった。

「僕は花の好きだった彼女の幻影にとらわれてこの庭を造っています。彼女なら花にどんな風に接するか、どんな種を庭のどこに蒔くか、花を愛でながら何を飲むか。僕は彼女がいなくなってから彼女のことしか考えられなくなりました。」

女性だったのだろうか、と瞳子は思った。その人が育てるように花を育てるとこの庭ができるなら、

「素敵な方なのね。」

ここには驚くほどたくさんの草花があるというのに、そのすべてが互いの養分を奪い合わず己の領分を守って共生している。きっと体力のいる育て方をしたのだろうと見れば分かる、見事な庭だった。

「とても。」

話すうちに花男爵はいつもの茫洋とした様子を取り戻していた。気がつけば重たげに頭を垂れる胡蝶蘭のつぼみをじっと見つめている。

「雨が降りそうだ。」

そしてまた、唐突につぶやいた。いつものことだから、瞳子も今更驚いたりはない。

ただ、雨が降るのか、と思った。空は明るいままだ。

「今日は帰ったほうがよいでしょう。ひどい天気になります。」

花男爵に促されて席を立つ。瞳子は、彼に従ったほうがいいことを知っていた。

「白いバラが咲いたら、彼女のことをお話ししますね。」

意識を瞳子以外の何かに向けたまま花男爵は穏やかな微笑みを浮かべる。

別れ際になると、彼のつかみどころのなさが色濃くなる。

「おいしいお菓子、期待していますね。」そんなことは思っていないのに、花男爵はいつもと同じことを言った。

「彼女」のことしか考えられない割には社交的な部分のある人だ。瞳子は不思議な人だとは思っていない。

帰り道は小雨が降った。窓から外を見る頃には側溝から雨水があふれるほどの大雨になった。ほらね、と瞳子は思う。彼はいつも瞳子にとって正しいのだ。

閑話

きゅうっと心臓を締め付ける感覚に目が覚めた。

月のない夜だった。夕方から真夜中にかけてひどく外を濡らした雨はやんでいた。雲間から時々除く星の光だけが部屋の中をぼんやりと照らす。

窓辺にはサボテンの小さな鉢が陣取っている。

十九歳の時に駆け落ち同然に家を出てからずっと育てているサボテンだった。

その時の彼とはもう一緒にいないが、いまだに実家には帰っていない。

両親は淋しがっているだろうか、とふっと郷愁に駆られて、奇妙な気分になった。

顔を会わせるたびにけんかばかりだった。求めるものに応えなければそばにいてだけで疎まれた

。

愛されたければ義務を果たせと言われていたようだった。

だから、無条件の愛をもらっていたあの女性が羨ましくて息苦しくなるのだ。ずるい人だと思った。

愛してくれた人を悲しませるなんて。

どろりとしたこの感情が鎌首をもたげて名前を持つ前にもう一眠りしよう、と瞳子は寝返りを一つ二つと打つ。

やがて訪れる、眠りの時。あのサボテンはいつ花をつけるだろうかと、意識を手放す前にふいに思った。

「アウトローも悪くないものです。」そろって季節を間違えたコスモスの前で花男爵は言った

。「予想通り、ですか？」

「今年は雨が多いですからね。」苦笑ともとれるような表情で肯定して、それから、と彼は付け加えた。

「今日はこれでどうでしょう。」

金箔がまぶしい茶器は見るからに高価そうだった。花男爵のほうは多分、漆が使っている。見なくともわかる。香ばしい薫りがずっと鼻に辿り着いた。

「緑茶ですね」

やっぱり彼はすごい人だ、などと瞳子はやけに冷静に思っていた。

花の機嫌も空模様も、そして瞳子が何を選んでやってくるかもわかっているのだから。

瞳子は紙袋を花男爵に手渡した。中には、物産展でやけに目を引いた牡丹花の練りきりがちょこんと鎮座しているはずだった。新芽を思わせるこの緑茶とよくあうことだろう。

「おいしく入っているでしょうか」

大丈夫、と瞳子は即答した。そんな確信があったのだ。「だとよいのですが」心底自身なさそうに花男爵は口を開く。

「実は、緑茶を淹れるのは今日が二度目なのです」

瞳子は驚いて彼をじっと見つめた。と言っても、この庭に似つかわしく、無礼になりすぎない程度の注視をもってそれを行った。

「彼女が飲んだのは紅茶がほとんどでしたから、勝手にわからなくて」

きっと彼にとっての照れを最大限に表したのだろう。おずおずといった態で花男爵は白状した。おや、と瞳子は思った。今日の彼はいつも以上におかしい。先日もおかしかったけれど、それとはまた違う種類の奇妙な雰囲気や彼から醸し出されている。たとえるならそう、初めて作った味噌汁を母親に味見してもらうこどもと同じ、期待と不安の入り混じった。

なんか変、としか言いようがなかった。もちろん口には出さなかったけれど、花男爵にも瞳子の思いは伝わった。

「自分でもよくわからないんです。でも、彼女がそうしろと言っている気がします。あの、僕も気狂いしたとだけ思っていたら」

あの花たちのように。二人そろって咲き乱れる橙の一面に目をやった。

「アウトローも、悪くないと思いますよ」

様子がおかしかりと瞳子は気にしなかった。この茶会が続いて楽しいものであればそれでよいのだ。

分かっているのかいないのか、彼はふにやりとへたくそな微笑を浮かべた。その顔があんまりにも彼らしかったので、瞳子はふっと吹き出してしまふ。彼らしくないのかいつも通りなのか分からない人だ。つられて花男爵もぷっと噴出した。

二人の笑い声が静謐な庭に響き渡る。主の心変わりにいち早く気づいたのは散り遅れた藤棚の薄紫だった。あまりにも荒々しく己の最後の一花を瞳子に降り注ぐ。先ほどまでの上品さとはまるで別人のようだ。花びらにまみれたその姿を見て、花男爵はひどく愉快そうに腹を抱えた。瞳

子もそれに倣った。

ああ、わたしもこの陽気にやられておかしくなってしまったのかもしれない。
瞳子は高揚した気分の中、ぼんやりとそう思った。

先日の奇妙な興奮とは打って変わって、花男爵はいつも通りかけろうのような存在感で立っていた。

あれは夢だったのだろうかと思子に疑ったとき、彼はようやく振り向いた。薄汚れたエプロンの存在が目新しい。

「あの日以来、妙にのびのびとしてしまって。反抗期かもしれません」彼は奔放に広がるクレマチスの蔓を片手にしていた。

「少し待っていてもらえばこの花は終わると思います」

見るからに困った様子で花男爵は白い花たちに目をやった。この花、と言うだけあってクレマチス以外の草花も今すぐ足を地面から引っっこ抜いて歩き出しそうな勢いだ。てんでばらばらに咲き乱れるカキツバタに菖蒲たちがうれしげにこちらを見つめている。

「実は気まぐれな花たちだったのね」

ため息をこらえて呟いた。おまけに女優になれる程度には演技がうまい。すっかり騙されてしまったようだ。瞳子は肩をすくめた。

「お手伝いします。済んだら一息入れましょう。お転婆なんだから」

「ありがたいです。あちらにエプロンの替えがありますのでどうぞ」

最初から手伝わせる気だったなと思子は思った。もぞもぞとシンプルなタイプの布エプロンを着て花男爵の隣に立つ。変な感じ、だ。花の世話など何年ぶりのことか。小学生のときに朝顔を育てたのが最後かもしれない。部屋のサボテンは、別物だ。

「彼女もね、おとなしそうに見えてすごいお転婆でしたよ。もう、見ているこちらが心配になるくらいで」

花男爵は本性を現した気分屋たちを一心不乱に支柱に這わせていた。瞳子はその隣でとても優雅とは言えない動きをしながら支柱同士を組み合わせている。力仕事は苦手なんです、と彼の細面に頼まれてしまったら断る選択肢は消えてしまう。それに、手伝うと申し出たのは瞳子のほうなのだ。

「服をどろどろにして両親にもよく叱られていましたね。懲りずに土いじりばかりでしたけれど」

「どろどろにしてってことは、昔からのお知り合いだったんですね」

「そうですね。彼女がこれくらいの時からです」

花男爵が親指と人差し指で10センチくらいの大さを示した突っ込んでいいのかしら、と瞳子は一瞬悩んだ。彼なりのジョークなのか本気なのか微妙だった。

仕方ないので「ほんとうにお互いのことをよく知っていらっしゃるんですね」と濁しておく。

瞳子が組み上げた支柱に花男爵が手際よく蔓を巻かせた。ようやくクレマチスはもとの秩序を取り戻したように見えた。今日だけで自分の土壌を増やしたことに満足したのかもしれない。

「お恥ずかしい話、僕が彼女のことをずっと見ていただけです。彼女は僕に興味がなかったと思います」

片思いだったのか、と瞳子は納得した。「多分」とつけ加えてから花男爵は止めていた手を動かし始めた。思いを伝える前に二度と会えなくなってしまったのかもしれない。

「そこそこ良い関係を築けていたと思っていたのは僕だけだったようです」

「そんな…」

「次は向こうのハリエンジュの剪定もしてしまいましょう。どうせですからね」

何がどうせなんだ、と一瞬頭をよぎったが、まあいいかと瞳子は花男爵の後姿を見つめた。

ええい乗りかかった船だ。ままよ!

シャキンシャキンシャキンと小気味よい音。

思ったよりもずっと背の低いハリエンジュの木はだがしかし、すぐに大きくなるという。

「まるで彼女のようにあっという間に大きくなって、すぐに僕の手を離れてしまいます」
まるで助手であるかのように剪定ばさみは瞳子の手に渡る。ゆるい手つきで拭って再び花男爵のエプロンポケットに戻した。

焦らすなあ、と瞳子はそろそろ思い始めた。多分今は亡き女性。植物が好き。花男爵の片恋の相手。そしておそらく幼馴染。彼の語ったことからわかっているのはこれだけだった。恋した幼馴染に先立たれてその幻影に捕らわれているのが、この哀れな男なのだろう。

「彼女は駆け落ちしてしまった僕の幼馴染なんです」とふいに花男爵は言った。
瞳子が星屑の如く散らばる欠片を集めてようやく辿り着いた結論はあっさりと覆された。主役の思わぬ反乱に瞳子は物も言えない。あれ、なんだか予想と違う。それにどこかで聞いたような話だった。

「何年も前にどこの馬の骨かもわからないような男と駆け落ちして、それ以来です。連絡もないし」

「...亡くなってしまわれた方ではなかったのですね」

「はは、なんですかそれは。たぶん元気ですよ。それだけが取り柄でしたから」
花男爵は困ったように笑った。あなたの語り口だと死んでるように聞こえる、と瞳子は思った。同時に駆け落ちしたら本人がコンタクトを取ろうと思わなければ二度とは会えないのは当然、と納得もする。いまどき流行らないけれど駆け落ちの経験が瞳子にもあった。そしてそれ以来地元の人間にはほとんど会っていない。

「年も離れていたから、半分妹のように感じていたんですけれどね。ある日急に姿を見せなくなって、ご両親が調べてみれば男と逃げたそうで」

まったくとんでもないお嬢さんでした、と花男爵が悲しそうに首を振った。瞳子のほうも確かにこれはお転婆だと納得せざるを得ない。生きていてくれたら御の字ですけど、と彼は静かに続けた。

「...でも、僕は彼女にとって頼りにならない人間だったのでしょうか」

ようやく瞳子は得心した。駆け落ちするほど悩みを抱えていた妹。彼女に相談もしてもらえず、頼りにならない不甲斐ない自分。花男爵の嘆きはそこにあったのだ。

「彼女がここに戻ってきたときに再び笑ってくれるために、僕はここにいます」戻ってくるかすらもわからないのに本当に情けないですよ、と彼は頭を掻いた。けれどその目に濁りのない信念が宿っていることに瞳子は気づいた。

「戻ってきて、ほしいですか？」

自分の経験も含めて瞳子は尋ねてみる。私の両親はどうだろうか。

「もちろんです。彼女はいつまでも僕の大事な人ですから」

だけど、何もなしに受け入れてやるなんて甘いことはしません。
家族なんだから叱るときは叱らないとね。

徐に毅然とした態度を見せる花男爵の姿に瞳子は笑った。また会えるなんて決まってもいないのに。

「だからあなたも、一度帰ってみたらいい。あなたの帰るべき場所に」
ティッシュ一枚分の軽やかな調子でつけ加えられた彼の言葉に、瞳子はきゅっと拳を握りしめた。

ああ、なんて人だ。わたし一度でも、駆け落ちしたと口にしてはいないのに。

花男爵と瞳子は、曖昧でぬるい風の下に視線を交わした。
瞳子が覚えている限り、初めてのことだった。

閑話

窓の外の景色は変わらなかった。

変わったのは自分だけ、と愁いの吐息を吐き出す。はたしてあの人は何と言うだろう。何を話そう。

勢いだけで飛び出してきた。これではまるで、あの時と同じままだ。自嘲の笑みがこみ上げてきた。

結局わたしは何も変わっていないのかもしれない。あの時から何一つ。

また来てくださいと別れ際に言われた。

白バラが日差しを浴びてまぶしい。わかりませんとだけ答えておいた。撫子が咲くころに、と彼は微笑んだ。それだけで、きっとわたしは進歩なくここに来るだろうと瞳子は思う。そこにあるのはわけもない確信だ。花男爵の誘いは甘美だった。抵抗する術も言葉も、理由こそない。

どうしてと尋ねてみた。彼のことだからはっきりした答えがもらえるとは期待していない。ゆえに、返事が思ったよりずっと鋭い形を以っていたことに驚いた。

「悪い顔をしていたから、あなたにも経験があるのかと思って」

当て推量、つまりなんとなくという名の勘かと思っていた。そうこぼすと、「あながち間違ってもいません」

言ってみただけです。まさかあたるなんて。と頭を掻き掻きかれは言明した。

「また来てくださいね」

差し出されたカーネーション。花束を抱いた瞳子と共に、列車は揺れる。

赤の花言葉は、愛を信じる。

様変わりした庭の手入れは楽しい。始めこそいかに収束させようかと悩んだものの、格段に生き生きしてきた様子を見ているとこれでいいかと思ってしまう。以前よりずっと手がかかるが、ずっと自分自身は楽しかった。

「で、どうしてわたしがお手伝いしなければならないのでしょうか」

困惑と不満の混ざった声音で瞳子は男爵を見つめた。睨みつける、のほうか正しいかもしれない。

「申し出てくださったのはあなたでしょう」ありがたいことです、と申し訳程度に付け足してから男爵は思った。それに、庭がこうなった責任は瞳子にもある。あの日から本当にここの花たちはのびのびしている。

「まあ、いいですけど…。あ、ちょっと、ですからそれは金木犀の分ですって」肥料をより分ける作業中、何度も同じセリフで叱られた。よく笑うようになったとか、よく喋るようになった、と瞳子についてどこかの教師みたいな感想を持っているとこれだ。

「ぼんやりしないで早く終わらせましょう」

わたし早くお茶にしたいです、と瞳子は言った。今日持ち込んだ茶請けの水菓子がいたくお気に入り、なのだという。ずいぶん蒸し暑くなってきた。心地よい冷たさがのどを潤してくれるだろう。そうですね、と男爵も頷いた。

「そういえば、帰省はいかがでした」

何気ない風を装って男爵は尋ねた。妙な沈黙が生まれる。瞳子の様子を見ている限りまずい結果ではなかったのだろうとは思ふ。しかし、聞かれたくないことだったのかもしれない。逡巡の後、男爵は言った。

「すみません。出すぎた真似を」

「母に泣かれました。父にはどの面下げて帰ってきたんだと言われました。それから大ゲンカしました」

わたし、勘当されていたんです。さらりととんでもないことを瞳子は言った。葉陰が瞳子の表情を巧みに隠す。喧嘩はよくないな、と男爵は眉をひそめた。誰かの泣き顔を見るのもなるべくお断りしたい。

「でも、わたし喧嘩できてよかった。父も母も元気なのが分かってよかった」

どんなに離れていても、やっぱり家族でした。瞳子ならそう言うだろうと予想した通りの言葉と、泥だらけの子供を見て仕方ないわねとほほ笑む母親のような、困ったような笑顔。カーネーション、母が飾っているそうです、と瞳子が告げた。

「ありがとうございます」

「いえいえ。喜んでいただけでよかった」

きっと花への礼だけではないのだろう、と男爵は思う。たくさんの言葉を吐き出してくれるようになったけれど、まだまだ男爵の知りえない感情を瞳子は抱えている。そんなことの一つが、この何気ないありがとうなのだと思う。

なでしこが咲いている。お茶会を始めよう。

